



沼津垣

※取り付けしていない状態のため、柱や下部の板はついていない。



縁は竹を折り曲げて、反対側に編み込んでいる。



垣根を斜めから見ると、編み目が揃い、上下左右が均等に編まれていることがわかる。鑑賞する角度を変えると、光の加減により異なった趣となる。



「五十三次 沼津」歌川広重



「五十三次名所図会 沼津(部分)」歌川広重



千本浜の仙松閣ホテル離れ(絵葉書より)

### 寄贈資料の中から 沼津垣

今回は資料の中から、沼津垣という、竹を網代に編んだ垣根を紹介します。年間を通して海から南西の風が吹く沼津地域では、冬の強い潮風や砂を防ぐために、隙間のない丈夫な網代編みの垣根がよく使われました。

沼津垣は、江戸後期には普及していたとみられます。文政10年(1827)に出版された、秋里籬島著『石組園生八重垣伝』<sup>あきさとりのとう いしがみその</sup>には庭づくりのための垣根と石組みの種類などを図解しており、沼津垣が紹介されています。また、その後発表された歌川広重による浮世絵には、沼津の特徴のひとつとして沼津垣が描かれています。

明治中期から昭和初期にかけて、保養の適地として千本から内浦までの海岸付近に別荘や旅館が次々と建

てられました。大正中期から昭和初期頃の絵葉書では、旅館などで沼津垣が使われている様子がみられます。

沼津垣の材料は、アズマネザサの一品種であるハコネダケ(箱根竹)を用います。ハコネダケは直径1cm程、稈の高さは2~3mになる多年生常緑笹で、箱根山周辺に自生しています。節の突起が少なく、編むのに適しています。竹を網代に編む際は、材料の幅と厚さをそろえること、編み目を詰めて隙間なく編むことが大切です。竹の皮を払い落として磨き、十数本ずつ束ねて編みますが、竹は先端にいくほど細いので、一束のうち半分を逆さにして幅を均等にします。<sup>ひんぱん</sup>頻繁に編み目を整え、縁は折り返して強度を持たせます。

## 駿河湾の漁

## 金指 貢さんの漁話

## 祝いの旗 大漁旗

あでやかな色づかいで、船の名前や「祝」「大漁」といった言葉が並ぶ旗を大漁旗と言います。沼津においてはフライキやフラホという名前でも呼ばれています。船を新造した時に行うフナオロシ（船下ろし）や正月のノリゾメ（乗り初め）や4月4日の大瀬祭りなど大瀬神社に船で参拝に向かう時には大漁旗を掲げました。今回は大漁旗のお話です。

大漁旗はフナオロシを行う1週間前ぐらいから船大工や魚市場など、金指さんが所属していた長宝組と関係のあるところから贈られます。30本以上の大漁旗が贈られることもありましたが、フナオロシに贈られる大漁旗とは別に「一等」や「優賞」といった言葉が染め付けられたものもあります。これは魚市場や漁業協同組合が漁獲の優秀だった網組や漁場に対して贈るものです。

フナオロシの時に贈られた大漁旗はフナオロシを行う船に飾り付けられます。オモテ（船首）に竹竿を立て、いくつもの旗が付けられます。また、オモテからトモ（船尾）にかけて渡したロープにもたくさんの旗が付けられます。ミヨシ（水押）には1枚の大漁旗をくりつけます。ミヨシの先端にはハチマキと呼ばれた紅白の布で巻いた麻縄を輪にした飾りが付けられます。舳先の両脇には丸い餅を貼り付けました。この餅は餅自体の粘着力で貼り付けているだけなので、いつの間にか取れて海へ落ちてしまいます。トモにも旗が1本付けられますが、大漁旗のように横長の旗ではなく縦長の旗が付けられます。この旗のことをセンリョウノボリと言います。長宝組ではセンリョウノボリの贈り主が決まっており、昔は内浦小海にあった杉茂というカツオ釣の餌買いから贈られていました。現在は長宝組の乗組員がセンリョウノボリを贈っています。

フナオロシの時に贈られたすべての旗は船のブリッジに大切に保管されます。

大漁旗はその名の通り、大漁の時に掲げられます。マグロが大漁だった時にはオモテに立てた竹竿の先端に大漁旗を1枚取り付けます。マグロ以外のイワシやサバといった魚の場合は、余程の大漁ではない限り大漁旗を掲げません。また、マグロが余程の大漁だった時にはセンリョウノボリをオモテに立てました。センリョウノボリをオモテに立てたことは昭和20年代に年1回あるかないかでした。金指さんが漁師になってからはありませんでしたが、マグロがさらに大漁だった時にはソウバタといって何本もの大漁旗を船に掲げることがあったそうです。たくさんの大漁旗を船に積んでいますが、この旗を立てれば必ず次の漁でも大漁になるという旗があり、縁起を担いでそういう旗を大漁の時には掲げます。

大漁旗を掲げる時はおめでたい時がほとんどですが、そうではない時に掲げることもありましたが、昭和23年に西浦江梨の沖で女性のホトケサン（死体）を拾ったことがありました。ホトケサンを網ですくい、ハツドウキ（動力船）のオモテに竿を立て、その先端に逆さにした大漁旗を掲げました。何も知らない若い漁師が「旗が逆さだ！」と騒ぎましたが、老漁師が言うには、ホトケサンを拾った時はサカサバタ（旗を逆さにして掲げる）にしなければならないということでした。そして、港に戻りホトケサンを警察に引き渡した後、酒を四斗樽で買ってきて、当番の家で大宴会が行われました。この大宴会はホトケサンに対する供養の意味があるとのことでした。その7日後、不思議なことにホトケサンを拾ったところでマグロの漁がありました。そして、四十九日が終わるまで7日目ごとにマグロの漁がありました。ホトケサンを拾うと漁があることは昔からいわれており、男性よりも女性のホトケサンの方が多くの漁をさせるそうです。

（話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住）



写真1：昭和35年のフナオロシ（金指貢氏所蔵）



写真2：大漁旗 縦1440mm×横2000mm（沼津市歴史民俗資料館蔵）

## ◆ぬまづ点描 「2つの首塚」①

## 1つ目指定首塚（千本松原）

加藤 雅功

沼津市指定史跡の千本松原の首塚は、集団の戦闘により沢山の首がまとめられたもので、後に供養墓の性格をなして円墳状の土盛りが築かれていた。

天正8年（1580）3月における甲州武田氏と小田原北条氏との戦いの地で、武田勝頼の軍勢が大敗を喫した痛恨の浜であった。北条氏は水軍の城の長浜城方面から軍船の安宅船を出撃させ、弓を射り、鉄砲を撃ち、大鉄砲が弾丸を飛ばす戦法をとった。この「駿河湾海戦」の際に、北条氏は千本浜へ追い討ちをかけ、無数の首を取っている。

昭和29年7月に東京大学人類学教室の鈴木尚氏の手により、本格的な首塚発掘調査が進められ、この戦いによる死者は、頭蓋骨から10代後半の若者が多く、一部の頭骨には刀で切り割られたものがあったという。

千本浜には江戸時代に複数の首塚が既に築かれており、気味悪がられて近くを通る者は稀であったという。筆者が中学生の頃は暗がりも多く、千本や市道を通学する際は、わざと避けて遠回りしたほどである。

白馬に跨がって塚の上から見下ろす首無し武者に出会うとか、砂を蹴立てて馬を走らせる首無し武者を見ることで、奇病に取り付かれたり狂乱するため、地元では夜間の一人歩きを禁忌していた。

首無しの亡霊話は今でも真しやかに語られており、息の長い民話・伝説の世界ではある。首塚は長く「恐怖の的」となっていたが、慰霊の功德からか「お首さん」と呼んでおり、頭痛など首から上の病気に「霊験あらたかなもの」へ転化して、民俗的にも興味深い。

なお『駿河の伝説』（昭和18年刊）に掲載されている「首塚」（沼津市）の話は、『静岡県伝説昔話集』（昭和9年刊）からの引用である。『日本の首塚』（昭和48年刊）では、百地さんの「千本松原の中」と岡林さんの「千本松原のずっと西部」を別のように見ているが、両方とも同じ千本のお首さんを語っている。因みに岡

林よしゑ先生は、私の叔母と静岡女子師範学校が同窓で、沼津の小学校の教員仲間であり、父とは書道を通じて交流があり、とても親しくして頂いた間柄であった。

千本松原では、明治33年（1900）5月11日の風害により、松林の中の古塚が崩れて頭蓋骨が露出しているのが発見された。市道の漁民がその付近を掘り起こすと、百人余り分の人骨が累々と積み重ねられていたという。俵に詰めて一旦長谷寺に葬ったが、後に今の本光寺の墓地辺りに埋め、明治35年（1902）9月に沼津の有志が追弔のために「首級冢碑」を建てて、戦死者の霊を慰めたという。しかし、本光寺が昭和25年に八幡町から移転後に整備した、現在の首塚の位置に至るまでの過程はやはり不可解である。

大正11年（1922）の『沼津町全図』や昭和3年（1928）の『沼津市全図』では、首塚が今の本光寺の千本墓地付近にはなく、甲州道（また甲州街道）よりも浜側に描かれている。市道集落からの「浜道」は墓地の大きな松付近で分れ、その「分か去れ」と甲州道との三角形の空隙部分がほぼ現在の位置となる。ここに浜側から慰霊碑を建てた首塚が移設されたのは、昭和5年頃と推定される。『沼津市誌 全』（昭和12年刊）に添付の精緻な地図の『沼津市全図』では、既に現在地付近に首塚が示されている。

後に市道青年会が玉垣を建設しており、記された昭和5年7月15日より以前に移設した可能性が高い。当時の写真からも玉垣が塚を囲み、全体が北西を向いていたのは変わらない。沼津仲町の池田氏が津元（網元）の「小池網中」の灯笼は左側で変わらず、右側に卒塔婆立てがあり、木製の掲示板は北寄りにあった。全体的に丸みを帯びた円墳を模した造りになっており、周辺の松は当時でもまだ幼木であった。

地図から種々検討をした結果、首塚は初期に甲州道よりも浜側の砂丘地の低地部分にあったことが分かる。明治35年に最初の碑を建てた首塚は、ほぼ発見された元の墳墓の位置に近いところにあったのである。



昭和3年「沼津市全図」(部分)



絵葉書「沼津公園首塚」(大正初期か)

現地において、市道の半農半漁の漁民が関わった、小池網組の漁場への旧浜道<sup>たど</sup>を辿ると、千本松公園の新しい浜道から左手に入った公衆トイレ先の散策路際であり、その旧道の浜道よりも南東寄りに、基礎となった間知石らしき大きな石が、今も2つ露出している。

さらに古い浜道の先の砂丘の高まりには、推定される高潮を防ぐ「潮除け堤」との交点付近に、新たに整備された井上靖文学碑が位置する。その手前の枯れた「冬濤の松」に近く、文学碑の北東側の窪地で、散策路がぐるっと囲む中央部に、直径10m前後で、高さ1m程度の高まりが今もあり、ここが古い松の倒木で発見された元の墳墓跡と推定される。

現在バスの通る千本浜への浜道に対し、「沼津公園」の碑が立つ「分か去れ」で右に向う浜道は、元の昭憲皇太后の御座所に向かう古い道で、途中から「塩の道」の甲州道が分岐する。2列に平行する千本砂丘の海側には潮除け堤が築かれ、より陸地側には中世起源と思われる甲州道が富士川河岸まで伸びていた。

「千本砂礫州」の浜寄りの砂丘上の松に限らず、背後の砂丘列間の低地にも太い松が沢山あったが、千本松原の「松枯れ」の被害は深刻で、松は細く矮小となり「小松原化」してしまった。また、墳墓の推定地付近は、激しい風食により根元がさらわれた「根上がり松」が、以前は数多く見られた場所でもあった。

今や松濤・松籟を感じる「千本の松原」の面影は薄くなり、かつての千本松原の風光明媚さも失いつつある。「市道の家」（現在の市立第二中学校の地）に住んだ、若山牧水は随筆で「松は多く古松、二抱へ三抱へものが眼の及ぶ限りみっちり相並んで聳えたってある」と記し、井上靖にも歌われた「千本の松の間の海のかげら（小石）」の景観の素晴らしさは弱まって

しまった。今では甲州街道沿いと寺寄りの窪みには松などの木々を欠き、下草の草草が広がり、松原全体が広葉樹林化に向かいつつある現状を知る。

「千本公園」の付近を概観すると、千本浜と背後の松原は富士川を起源とした砂礫からなり、井上靖の歌にもある浜や松原内の小石が示すように「千本砂礫州」を基盤として、その上に被覆砂丘がほぼ2列存在する。また、景観を構成する松林越しに富士山を遠望する絶景の地でもある。前面の駿河湾側は砂礫の浜で、富士川に向かって弓状に弧を描く様を望むことができる。早くから臨海公園として整備が進んだ地である。

千本地域は、かつて畑作物の栽培が盛んで、砂丘の砂地故の「乏水地」だけでなく、海からの松風が強く、防風林（県有林）として松林の整備も進むが、古くから塩害に泣かされた土地であった。連続する防潮堤の建設以前は、高潮災害にも悩まされて来た。それに加えて、明治期の風害は松の根元の砂や砂礫をさらい、市道（五反田）や松下・下一丁田方面の住民に対し、新たに顕れた「髑髏塚」が怖がられることとなった。

道路整備以前の昭和25年よりも前は、首塚は現在地より5m前後、県立沼津西高校のグラウンド寄りに位置し、当時細かった浜道沿いにあった。溶岩の石積みは単に首塚のモニュメントに過ぎず、地下の部分には度々改葬を進めた結果、埋葬形態は崩れて、平板石の上に10数体分が置かれ、その下に100体分かの碎けた骨片が大甕に納められていた。碑も合わせて現在地に三度目の移転をしたものと思われる。

首塚は市道町の浜道に接しており、浜側から移転する前から「お首さん」と呼ばれ、親しまれている墳墓である。地元の世話人、青年会、自治会、長寿会が整備を重ね、今も香花が添えられて線香の煙が絶えない。

## 資料館からのお知らせ

### 夏休み体験教室のようす

8月10・11日に「夏休み体験教室」を開催しました。火打ち金と火打石による火起しや石臼による米粉や黄



体験教室の火起し体験の様子（8/10）

な粉作りを体験しました。昔の人にとっては簡単な作業であっても、火起しはなかなか難しいようです。火花が火口にうまく落ちてくれなかったり、ようやく火種ができて付木に移す前に消えたり苦戦しました。体験メニューを増して行きたいと思います。

### 沼津市歴史民俗資料館だより

2018. 9. 25 発行 Vol.43 No.2 (通巻219号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: [cul-rekimin@city.numazu.lg.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp)